

# 東海地方の若者方言 2～文法、あいさつ表現、意識

## The dialects used by the young generation in the Tokai Region 2

### - Grammar, Greeting expressions and Awareness -

山田敏弘<sup>1</sup>

YAMADA Toshihiro

[キーワード Keyword]	東海地方方言、若者世代、文法、あいさつ表現、方言意識 Tokai dialects, young generation, grammar, greeting expressions, awareness of dialects
[所 属 Institution]	<sup>1</sup> 岐阜大学教育学部 (Faculty of Education, Gifu University)

[要 旨 Abstract] 前稿に続いて、東海地方の大学生世代の使用する地域的偏在を有する言語形式について、特に、文法形式、言語行動のうちあいさつ表現、そして方言に対する意識を取り上げ、アンケート調査をもとに地理的分布を含めて考察する。

文法形式については、敬語と否定に関するものを取り上げる。敬語は、敬意をはじめ、対人コミュニケーションに関わり、また話者の個性を表示しやすい部分であり、一方の否定は、関西系の「～やせぬ」に由来する形が当地には見られ興味深い題材である。文法形式に関しては、結果として、地域独特の表現を保持していることが確認された。また、昨今、大きな研究テーマとなっているのが、どのような場合にどのような言語形式を用いるかなどの研究である言語行動の方言差である。今回は、朝と昼のあいさつを調査したところ、昼のあいさつは「ヤッホー」にほぼ統一されているという結果を得た。さらに、方言に対する意識が低いと言われてきた東海地方であるが、その意識の改善も確認された。

## 1. はじめに

前稿に続いて、東海地方の若者方言に関する調査結果を地図にして示し、そこから分布と以前の調査からの変化を考察する。前稿では、アクセントと語彙について見たが、本考察においては、文法形式と言語行動、及び方言に対する意識を見ていくこととする。

調査の方法および地図化に関しては、前稿を参照されたい。

## 2. 文法形式

若者が方言を使わなくなったとよく言われる反面、文末の文法形式は若者世代でも頻用されている。中でも、進行および結果を表す「～トル」は、使わない学生を見つけることが困難であるほど普通に使われているし、否定の「～ン」も、東海3県の共通語となっていると言って過言でないほどである。

今回は、敬語に関し補助動詞「～テミエル」と尊敬語形の「～ヤース」およびその命令形の「～ヤー」、ならびに否定形式について調査した。

### 2.1 「～テミエル」

共通語の「みえる」は、共通語では「来る」の尊敬語としてのみ使用されるが、東海地方では「いる」の尊敬語としても用いられる。このような方言という意識のなさは、図1のように、名古屋市科学館のような公的な場所で掲示物に用いられていることから理解される（ただし、この「みえない」は「来ない」の意味でも解釈ができなくはない）。

「いる」の意味での「ミエル」に方言としての意



図1 名古屋市科学館の「ミエル」2008. 7. 10撮影

識がなければ、当然、補助動詞として進行・結果を表す「～ている」の尊敬語形としての「～テミエル」も、方言という意識なく用いられる。今回、愛知大学の授業において、「聞かない」と回答した者を除く全員が、共通語であるという意識と回答した(2022.12.20調査)。

さて、この「～テミエル」は、今回の椋山女学園大学における調査で図2のような回答を得た。実際には、学生世代で「使用する●」と回答した人は、99人中17人と少ない。「(使用しないが)聞いたことがある▲」21人を合わせても、5人に3人が「聞いたことがない×」と回答をしている。

地理的分布に関しては、静岡県出身者と東三河出身者は「聞かない」という回答となっている。尊敬の補助動詞に関しては、過去に調査したことがないため比較する材料がないが、三河地方、特に東三河での使用は限定的であると言えそうである。

一方で、名古屋市内など尾張地方でも広く「使用しない×」が見られることが確認された。これは、地域として使わなくなったということではなく、学生世代のような、アルバイトで提示されるマニュアル敬語以外に敬語を多用することのない世代では、まだ「～テミエル」の使用される環境が多くの場合、身近にないということを示しているものと考えられる。尊敬語は社会の中で使用していくものであり、大学生世代では純粋な地理的分布はつかめない。

## 2.2 「～ヤース」

愛知県尾張地方の伝統的な尊敬語形式は「～ヤース」である。「食べヤース」「書キヤース」のように用いることから理解されるように、基本的に連用形に付き、五段動詞では拗音化する。サ変動詞は「シヤース」であるが、カ変動詞は「キヤース」ではなく「コヤース」となる。「いる」については、「オイデル」の命令形「オイデヤース」が「オイジャース」を経て「イリヤース」となる不規則活用であるが、その命令形「イリヤーセ」が居酒屋の名前(「いりゃあせ」と仮名書きされた。東京進出に伴い「素材屋」と改名)として用いられているなど、一定年齢以上の名古屋圏の人間には、懐かしい名前でもあり、方言としての意識もある。

この由緒ある尊敬語形式は、すでに「～ヤース/ヤース」といった終止形ではほぼ聞かれないことが図3から分かる。また、「～ヤーセ/ヤーセ」のような命令形も、同様に使用することもなければ聞いたこともないという人が大多数であった。今回の調査結果もそれを裏付ける結果となった。

## 2.3 「～ヤー」

前節の「～ヤース」の下略形が「食べヤー」「書キヤー」「シヤー」「コヤー」などの軽い命令の形式である。こちらは、次ページの図4に示した通り、若い世代でも広く使用が確認でき、また、日常会話を観察していても頻用される形式である。

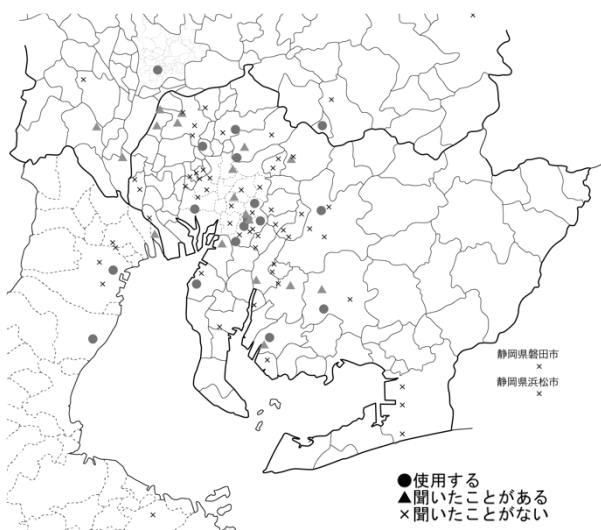


図2 「～テミエル」2022. 6. 16

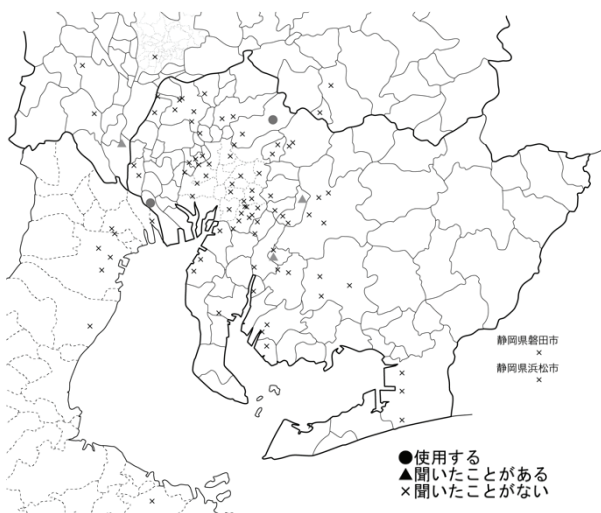


図3 「～ヤース」2022. 6. 16

ただし、詳細を見てみると、2つの問題点が指摘できる。

1つは、元の形が廃れて聞かれなくなった中で、下略形だけが独立して残ったという点である。このような例は特別ではない。共通語でも「～てください」の動詞由来部分がごっそり落ち、「～て」だけで、(本来の接続助詞が、それ自体が依頼という機能をもつわけではないにもかかわらず) 依頼という機能を担っているし、当地の方言では、否定推量の「まじ」に由来する「まい」に反語の終助詞「か」が付いた「まいか」が、「～ないだろうか」と疑問を投げかけることで勧誘の意味をもつが、方言としての用法では終助詞を落とした形の「マイ」が、(本来否定推量の意味でしかないが) 勧誘の形式となっていることなど、下略は文文化の一方式である。当然、「～ヤー/ヤー」も独立した機能をもつことに何ら不思議はない。むしろ、下略することで旧来の「～ヤース/ヤース」から解放され独自に依頼という機能を有するに至ったことで、現代の若者世代にも受け継がれやすい形となったと言えよう。

もう1つは、待遇意識である。「食べる」や方言形の「食べヨ」と言えば強く響き相手を怒らせてしまうが、「タベヤー」と言えば角が立たないと母語方言話者は捉えている。これは、「～ヤー/ヤー」が下略形とは言え、尊敬の助動詞「やす」に由来する(芥子川1971:167)ため、裸の命令形よりも高い待遇を表すことがやわらかい命令として機能しているためである。

さて、この結果は図4に示した通りであるが、やはり三河地方では「聞いたことがない×」の割合も高くなっている。特に、東三河にはこの形式が用いられるという回答はなく、尾張に隣接する西三河地方、今回、もっとも東として岡崎市を使用するとの回答が1件、使用しないとの回答2件と混じって見られたのみであった。一方、愛知大学での追跡調査では、豊橋市(複数)や蒲郡市、さらには県境を越えて静岡県浜松市西区でも「食べヤー」を使用するとの回答を得ており、実際の使用域は三河からさらに東へ及びつつあると言えそうであるが、詳細は不明である。愛知県外については、三重県北部や岐阜県南部に「～ヤー/ヤー」が若い世代にも確認され、日常的に使用されることが確認できた。

この点について興味深い研究がある。西尾(2022)は、愛知県西三河地方出身の男女222名に対してアンケート調査を行ない、本来、「[連用形]リン/(i)ン」で軽い命令を表してきた三河地方では、「相手の行動が遅く、イライラしたので、早くしてほしい旨強く伝える」(以下の②)など、より強い働きかけを意味する場合に、2番目の棒グラフが示す「～ヤー/ヤー」が用いられる傾向があると指摘している。

以下の場面で、あなたはどの表現をより使いますか。

- ① 相手の行動が遅かったので、早くしてほしい旨を優しく伝えるとき。
- ② 相手の行動が遅く、イライラしたので、早くしてほしい旨を強く伝えるとき。
- ③ 相手の言動にあきれて、「もう、そうやって言っていればいいよ。」と言うとき。
- ④ 相手に相談をされて、アドバイスをするとき。

(西尾2022:9-10より)

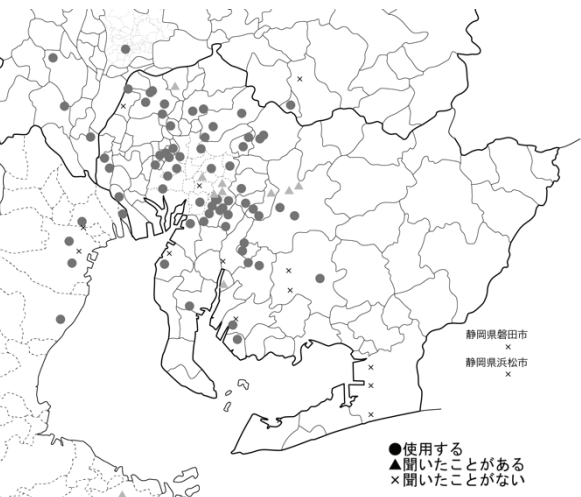
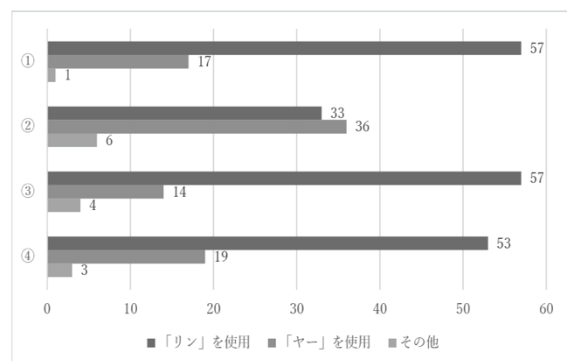


図4 「～ヤー」2022.6.16



グラフ1 場面ごとの「リン」と「ヤー」の使い分け

西尾(2022)の調査対象となったのは、10代26名、20代112名、30代16名、40代20名、50代17名、60代11名、70代13名、80歳以上7名と、年齢的にばらつきもあるが、比較的若い世代の傾向として、「[連用形]リン/(i)ン」と新形式「～ヤー/ヤー」を使い分けていることは一定程度ありそうである。三河地方に進出している「～ヤー/ヤー」は、単なる地理的分布の広がりだけでなく、用法の差を生じている。それは、「いす」と「チェアー」が日本語では、前者を一般的なもの、後者を背もたれのある特別なものと言いつけているのと同じく、従来の形式を一般的な用法のものとして残しつつ、新規形式に特別な限定を付すことと同じである。

なお、今回、椋山女学園大学での調査では五段動詞は調査しなかった。五段動詞の場合、本来、「書く」であれば「書キヤース」から「書キヤー」になるはずであるが、近年、「書キヤー」という非拗音の形が一部地域で使用されている。これは、一段動詞の「ヤー」が命令形式として再分析されて、五段動詞にも連用形に付いたものであり<sup>1</sup>、原理としては、「食べさせてもらう」から「させてもらう」が切り出されて「書かさせてもらう」ができたことと同じ異分析であり類推作用による平準化である。このような異分析は、「書かせる」に「てもらう」が付いたというよりは、「させてもらう」という語尾が独立した意味を強固に持つに至ったことによると考えられるが、同様に、「～ヤー」が「～ヤース/～ヤース」から生じたというよりは、「～ヤー」自体が独自に軽い命令という意味をもつようになったことによるものと考えられる。

さて、この「書キヤー」のような五段動詞の軽い命令形は、2010年の調査で、名古屋市のような「～ヤー」を中心的に用いてきた地域よりも、周辺部の、特に岐阜県美濃地方に多く見られる形式であることが分かっている(図5)。これは、ちょうど一段動詞のラ行五段活用化が逆周圏分布を呈するように、周辺部に規範意識から逸脱した形式が生じやすいことと似た現象と捉えることができよう。

また、時間がなく、地図化はできなかったが、2022年12月14日、15日に岐阜大学で57名を対象にした小調査を行なった。地域としては、岐阜県内が広く、愛知県三河地方は、安城市までの範囲であった。「食べヤー」「書キヤー」は、安城市を除くほぼ全域で使用する、または聞くことが確認できたが、「書キヤー」は、愛知県内では西尾市1箇所で使用が確認できたのみで、愛知県内の若者にはほぼ使用されないとの結果であった。一方、岐阜県内についても、関ヶ原町、本巣市、瑞穂市、岐阜市、各務原市、関市のほか、大



図5 「書キヤー」2010. 5. 12

野郡白川村出身者からも使用するとの回答があったが、割合としては、42人中16人と4割弱にすぎず、2010年調査よりも衰退していることが見て取れる。ラ行五段活用化もそうであるが、このような類推によって生じた新形式は、大きな潮流となって地域に広がることで定着していくこともあれば、短いスパンで淘汰されていくこともある。「五段動詞連用形+ヤー」は、後者であると言えようか。今回の岐阜大学での小調査では決め手は得られなかったため、継続的な調査が必要である。

## 2.4 否定表現

否定表現については、世代間の変化が著しい。かつては、名古屋でも「ヤメレーセン」(やめられない)の

<sup>1</sup> 芥子川(1971:168)には、五段動詞「待つ」に対し、「まちや」という「命令表現」が、「お、まちやア、たいもない事おっせるぞ。」という用例とともに指摘されている。芥子川は、これを「まちやーせ」の下略と見ているが、これが拗音なのかは不明である。ただし、芥子川(1971:167)には、名古屋方言としては拗音と判断していると読み取れる記述があり、少なくとも古く京坂からもたらされた尊敬語の連用形接続の助動詞「やす」が非拗音のまま現代につながっている証拠はない。

ような否定形が聞かれたが、2009年の調査では、岐阜県内にこのような「～やせぬ」を語源とする否定形が一部残るものの、愛知県内ではほぼ聞かれない形となったと結論づけた(図6)。

それから13年、今回は、否定表現としてもっともよく使う形式を、「食べる」を例にして、単純に問うた。2022年調査では記号が異なるため比較しにくい、次の点が見て取れる。

まず、愛知県内にも、「食べへん◆」や「食べーへん■」さらには、「食べーせん■」のような「～やせぬ」に由来する形式が一定数確認できることである。「食べへん◆」は、尾張地方北部の一宮市旧尾西地区や西部の愛西市旧立田村地区など、岐阜県に隣接している地域はもとより、尾張地方北部の小牧市、名古屋市内南部や三河地方の安城市にも併用語形として見られる。また、一方で、「食べーへん■」と「食べーせん■」は、名古屋市内南部に併用語形として見られる。前回調査と比べて「～やせぬ」に由来する形式が多く見られる理由は後述するが、全般に「食ベン(2009年調査では・、2022調査では○)」が愛知県内の若者世代で主流の語形であることには変わりがない。

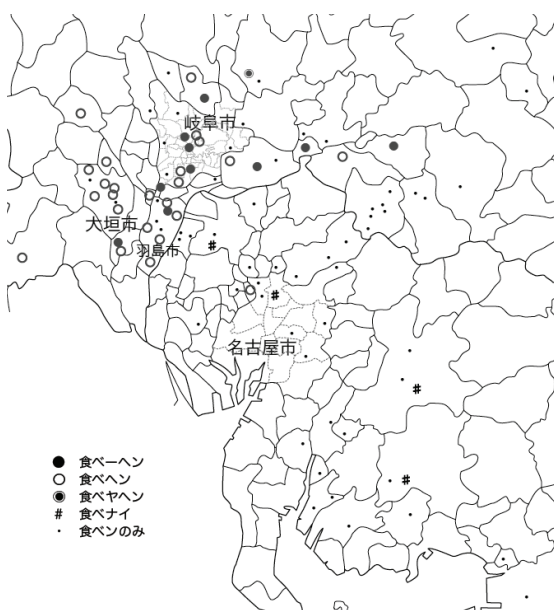


図6 「食べない」の言い方 2009. 5. 8

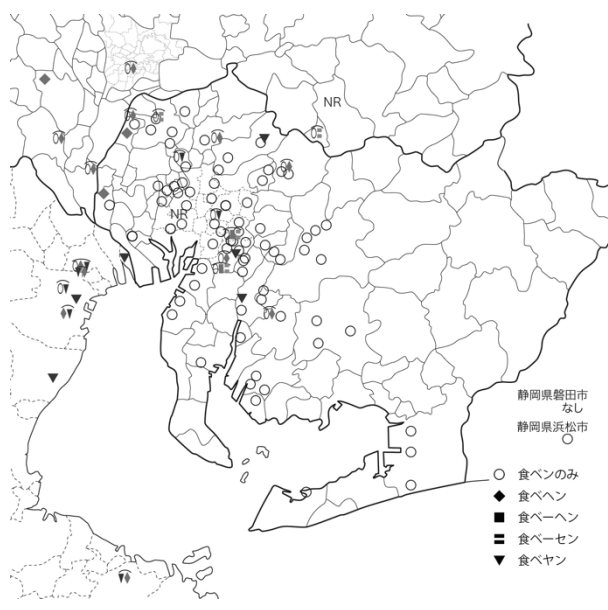


図7 「食べない」の言い方 2022. 4. 21

一方特筆すべきなのが、2022年調査で尾張地方に見られるようになった「食べヤン▼」である。これは、春日井市、北名古屋市、名古屋市内南部、刈谷市に見られるが、本来は三重県で多用される語形である。愛知県内で広く否定の「～ヤン」が用いられるとの情報は、寡聞にして知らない。このことは、図7の三重県の分布状況からもよく分かる。

では、なぜ否定の「～ヤン」が名古屋市など尾張地方にも見られるのか。否定の「～ヤン」は、「～ヤへん」が変化したものとの説がある(山本1982:222など)一方、一段動詞のラ行五段化現象によって生じた語形であるとの説もある。前者の説に立てば、尾張にかつてあった「やせぬ」に由来する形式から、独自に「～ヤン」へと変化したと考えられるし、もし、後者の説に立てば、尾張地方にラ行五段化の現象が観察されたとの報告はないため、他の地域から持ち込まれた可能性が高い。当該の回答をした者に対して詳細にフォローアップインタビューをしておかなかったため決め手はないが、岐阜大学での小調査で、愛知県、特に尾張地方で「食べヤン」のような否定形は得られていないことから考えると、おそらく、名古屋の女子大というところが、より流行に敏感であり、大学生となって交流ができた他県民から目新しい形式を借用して用いているということと推察される。この点は、さらに調査の必要があろう。

## 2.5 まとめ

以上、文法形式について見てきた。多くの語に付加される助動詞は、汎用性があり、その分、地方として

の個性を演出しやすく、また気安いことばとして距離感も測りやすいことが理解された。一方、逆周囲分布的な地方規範からの逸脱と過剰一般化によって生じた「書キヤー」のような形は、その分布の拡大が見込めなくなると消失していく方向であることも確認された。一方、否定表現は、かつてこの地域に広く存在した「～やせぬ」に由来する形式は減退の一途をたどっている反面、新語形「～ヤン」の広がりを確認した。

方言の文法形式は、変化のスピードが意外と速く、経年変化を追う必要がある。

### 3. あいさつことば

椋山女学園大学における毎回の調査では、他に朝と昼にどのようなあいさつをするか問うた。

#### 3.1 朝のあいさつ

朝のあいさつは、「おはよう」が単独で用いられるか併用されるかのいずれかで、伝統的な形式から大きな変化は捉えられなかった。

「おはよう」には、敬意の込められた「おはようございます」が別にあり、「おはよう」が気軽なあいさつという意識を保っているためと考えることができる。

なお、併用される語形としてもっとも多いのは、「やっほー」類であり、やはりこれもあいさつことばと認定してよい。他には、「はよー」や「おっす」や「うす」のようなあいさつことばが併用されたり、「げんき？」のような体調伺い、「ねむい」などの自己表現が回答されたりもした。体調伺いや自己表現があいさつのような定型表現と言えるかは別に考える必要があるが、習慣的に用いられているという意識があるため、あいさつ表現であるここでは受け取っておく。

いずれにしても地理的な差異は、予想通り、観察されなかった。

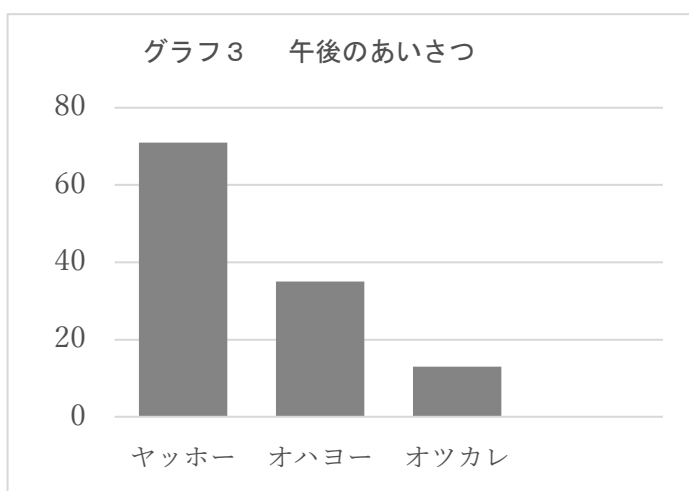
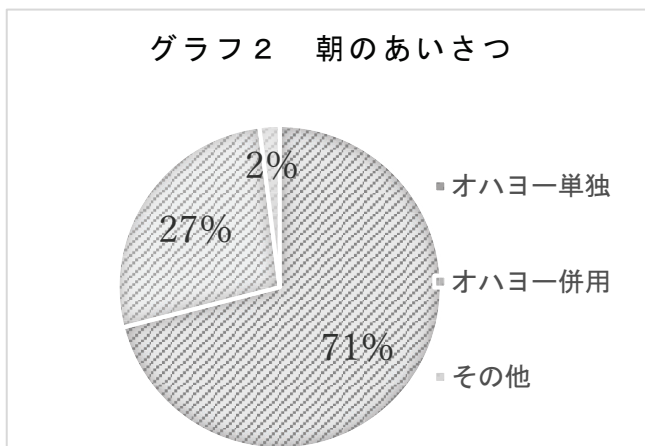
#### 3.2 午後のあいさつ

一方の午後のあいさつは、朝のあいさつよりバリエーションに富んだものとなった。トップ3を示すと次のグラフのようになる。回答総数は100である。

もっとも多いのが「ヤッホー」である。岐阜大学でも同様に、午後に交わされるあいさつでもっとも多いのは、やはり「ヤッホー」である。「こんにちは」では表せない親しさの表現を模索した結果であり、ほかに「ヤッポー」や「ヤホ」などのバリエーションも存在する。

「オハヨー」と答えた学生からは、アルバイトの影響で朝昼晩、いつでも「オハヨー」と言っているという証言が得られた。「オツカレ」は、昼にはすでに授業が終わって帰路に就く学生もいるとの判断があるようであるが、広く使われる。「コンニチワ」はわずかに1名。すでに日本語を母語としない人に対する日本語の教科書でも、昼のあいさつを「こんにちは」から「ヤッホー」等に変更しなければならない時代になっている。少なくとも、「こんにちは」は、親しい人に対してはやや「疎遠」との意味を含んだ表現として位置づけなければならない。

バリエーションに富んだ状態と最初に述べたが、状況に合わせているという点で「オツカレ」などはあいさつ表現と言えそうであるが、天気に合わせて表現があるわけではなく、全般に単調である。それが定式化



されたあいさつ表現の特徴と言えるのだが、そんな中で「ヤッポー」や「ヤホ」など、より親しみを込めて相手によって使い分けるなどの意識も見られる。「ヤッポー」一色で単調に感じられれば、差別化を図ろうと新奇の表現を求める。これも若者世代のことばの特徴である。

さて、この「ヤッポー」は、方言なのであろうか。いちいち個別のインターネット情報を引用して挙げるまでもなく、実際には全国的に用いられているようである。そういった意味では東海地方に限定された語形ではないが、東海地方の若者が用いる言葉の一側面として報告しておく。

#### 4. 方言に対する意識

方言に関する意識については、岐阜県の研究者として苦い調査結果がある。1994年から1995年にかけて全国14地点に行なわれた調査で、岐阜県大垣市が最悪の結果を得たことである。沖(1999:25)は、「方言が好きか」という問いに対する岐阜県大垣市の回答において、高校生で千葉に次いで低い26%が肯定的であったとし、高年層では全国最悪の36%という低さであったと報告する。また、加藤(1999:189)も、「方言を後世に残したいか」という問いに対する大垣の高校生の意識が24%と、やはり東京、千葉に次ぐ低さであったと報告する。若い世代に方言が否定的に受けとめられている事実に対し、岐阜県出身の方言研究者というよりも、一県民として、忸怩たる思いを抱く結果であった。

しかし、現在、この結果を話すと、学生には違和感があるようなのも事実である。

本節では、1994-95年の調査から四半世紀経って意識がどう変化したかを考える。

##### 4.1 「方言は好きですか？」

まずは、名古屋の椋山女学園大学における調査の結果を地図に表して示す。

結果は図8のとおりである。総数101人中、64人が「好き●」、9人が「嫌い×」、28人が「どちらでもない」と答えており、広範囲に「好き●」という回答が見られた。まずこの点が予想外であった。

一方、地理的な分布を明確に得られたかというところではないという見方ができるであろう。ただ、三重県内では肯定的な見方が多く、反面、名古屋市内においては否定的な回答が多く見られたことは特徴として挙げられよう。三重県内では、関西アクセントと否定の「～ヤン」がかわいいと愛知県民からも褒められるなど、他から肯定的に捉えられていることが一因であるようである。一方、

名古屋市内では、肯定的に捉えている人が18人中8人、どちらでもないも8人、否定的2人と、肯定率が他地域よりやや低い。中には、「市長の名古屋弁」を否定的イメージの原因として挙げる声が聞かれた。ただ、名古屋市内を除外すれば、すでに沖(1999)や加藤(1999)の報告がすでに過去の状況であったことを示している。

もちろん、「方言が好き」は、「方言を後世に残したい」とイコールではないし、方言の授業を受講している学生が調査対象であるから、その点は割り引いて考えなければならないが、一時代前のような若者世代の大半が方言を否定的に捉える時代は終わったと言える。

同様の調査を岐阜大学でも2年生から4年生までの専門の授業の受講生57名に対して行なった。出身地は、岐阜県出身者が41名、愛知県出身者が15名、三重県出身者が1名である。「方言が好きか」という問いに対して、5段階で回答してもらうと、「とても好き」が17名、「やや好き」が29名、「どちらでもない」10名、「やや嫌い」1名で、「大嫌い」は0名であった。これも、国語の教科専門の授業を受けている上、教員の専門に付度したこともなくはないが、アンケート自体は匿名であり回答によって不利益を蒙ることはないと言明してある。この内、岐阜県出身者に限定しても、「とても好き」が15名、「やや好き」が20名、「どちらで

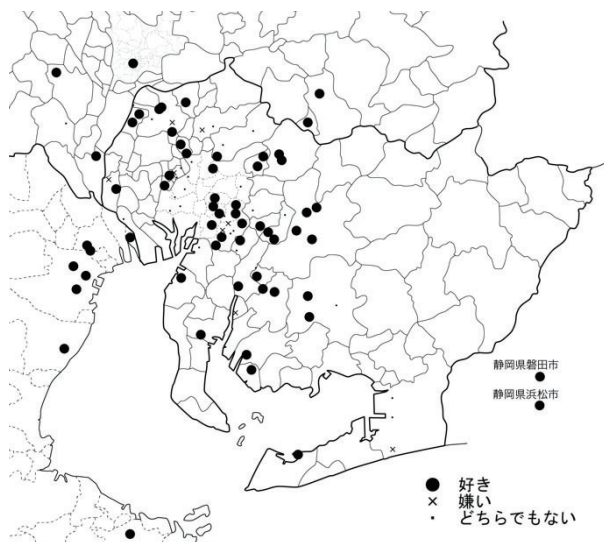


図8 「方言が好きか」2022. 6. 30

もない」5名、「やや嫌い」1名と、肯定的な回答が多く、全般に方言に対するイメージは改善していると言  
ってよい。

さらに同様の調査結果は、名古屋市役所広報広聴課による平成21年度第3回市政アンケート「名古屋のこと  
ばについて」(2009, <https://www.city.nagoya.jp/sportsshimin/page/0000004210.html>=2022.1.4確認)にも現  
れている。名古屋市内に居住する満20歳以上の市民2,000人に対して無作為抽出で行われ1,157人からの回答  
があった調査の中で、「あなたは名古屋弁に対して具体的にどのような印象を持っていますか」という問い  
(複数回答可)に対し、「親しみがもてる」が40.4%と最も多く、次いで、「田舎的」35.3%、「温かい」  
29.9%、「汚い」28.3%、「面白い」28.3%などとなっている。もちろん、大垣とは県も違う上、好悪両方の  
印象があるが、この結果と比較しても、今回の若者世代に対するアンケート結果のほうが、よりポジティブ  
であるとも言えよう。今後は質的調査も含めて考察していく必要がある。

#### 4.2 東京の山手線内で同郷の友人と話す際に方言を使うか

意識として「好き」と回答していても、実際に使用する場面を想定すると使用できないこともある。今回  
は、具体的に東京の山手線内で同郷の友人と話す際に方言を使用するかという問いを投げかけた。

結果は図9のとおりである。総数101人中、64人が「はい●」71人、「いいえ×」19人、「どちらでもない」  
11人と、図8に示した結果よりも、若干「はい」が多く、反面、「いいえ」も増えた。

興味深いのがその相関である。「方言が好きではない」と答えていても、東京の山手線内で同郷の友人と  
話す際には使用するという人は4人。出身地は、愛知県西尾市、豊明市、一宮市、高浜市であった。また、「好  
きでも嫌いでもない」としながらも東京で使用するとした人は22人。こちらも出身地に地域的な偏りはない  
かった。

逆に、「方言が好きであ」っても東京の山手線  
内で同郷の人と話す際には方言を使用しないとい  
う人は、10人、山手線内で使用するかわからな  
いという人は8人であった。岐阜県東濃地方の2人  
や名古屋市でも周辺部の出身者が多いことなど  
がやや傾向として見られるであろう。最初から  
「方言が嫌い」で使用しないということであれば  
一貫性もあるが、特に、このような方言を隠した  
がる18人は自己肯定感ならぬ地元肯定感が低い  
と考えられる。では、この方言に対する価値意識  
の低さはどこから来るのであろうか。

1つには教育である。すでに学習指導要領が改訂を  
重ね方言に対するマイナス意識は払拭された感  
はあるが、それでも方言に対する低い意識は  
特に年配の教員に残っていないわけではない。い  
ずれエビデンスを揃えて論じる必要がある。もう1つは、やはり(インフェリア)コンプレックスである。  
方言が好きであっても東京では話せないという意識は約1割にあり、迷いもある人も含めると5人に1人がや  
はり何らかの恥ずかしさを方言に対してもっている。この劣等感の源が経済的な差として生じたものなのか、  
情報源として優位な東京に対する憧れの裏返しなのか、はたまたタモリにかつてばかにされたことを根に持  
っているのかは調査し切れていない。

ただ、同じ調査を岐阜大学で行うと、違った結果となった。岐阜大学で同じ「山手線内で同郷の友人と話  
すときに方言を使用するか」という問いを投げかけてみたところ、「はい」が87.8%の50名であった。「いい  
え」は0名、わからないが7名であったことは、明確なスタイルシフトをして隠そうとする意図は、すでにこ  
の世代にないことの証左である。この比較からはっきりしたことは言えないが、自分自身に自信を持つこと  
が地元肯定感にもつながっているということを示唆するものではない。

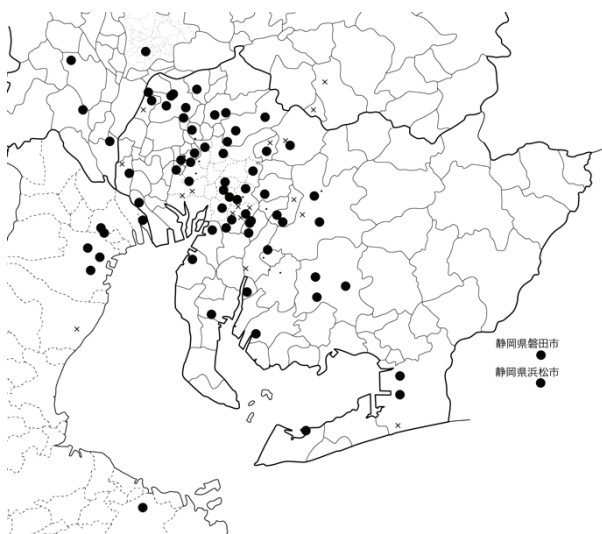


図9 山手線内で同郷の友人と方言で会話 2022.6.30



さらに岐阜大学では、「方言は価値ある存在であるか」という問いも投げかけた。この問いに対しては、「はい」が49名であったのに対し、「いいえ」が3名、「わからない」が5名であった。教員養成も、教科教育法に重点が置かれ教科内容を通じて学問分野の奥深さをゆっくり考える時間が減っている。それに伴い、また、方言自体を知らない学生も増えてきたために、個人的にも方言の価値を話す機会が減ってきた。それはすなわち、地元の価値を話すことも少なくなったということである。しかし、今後も地域で生活していく多くの学生に対し、方言という地元のことばの文化財を伝えていく重要性はむしろ高まっている。このことを肝に銘じて教壇に立たなければならない。

## 5. 方言アンケートがもたらす教育効果

最後に、方言を考えることがどのような教育効果をもたらしたかも検証しておきたい。

今回は、名古屋市にある椋山女学園大学、及び、豊橋市に学舎がある愛知大学地域政策学部においてアンケート調査を行なった結果を中心に考察した。学生の出身地について、岐阜大学で得られるアンケート結果を補完する意味合いが調査者にはあったが、同時に学生にどのような効果をもたらしたのだろうか。

どちらの受講生も、もちろん一部に例外はあったが、受講のモチベーションは総じて高くなかった。専門以外の自由選択科目に位置付けられた科目であれば、それがふつうであろう。しかし、いずれの授業においても、岐阜大学でやっているのと同様に、毎回のリフレクションをチェックしコメントを付けて翌週までには返却することでコミュニケーションを保とうとしたし、その他にもいろいろと手を打ってなんとか関心をもたせようとした。その1つが方言アンケートであった。

方言と言っても、すでに伝統的な名古屋方言は廃れ、受講生に通じるのは、せいぜい「えらい(しんどい)」くらいである。この歴史的価値に関心の低い学生に教え込もうとすることは、教員のエゴである。「方言」の内容を変えなければならない。今回の授業では、伝統的な方言の代わりに、若者でも使用する地域特有の表現を取り上げてアンケートを採ることで、自分も使っていることばが多様性の中の1形式であるとの意識をもたせ授業にも関心をもたせようとした。

これは、授業の出席確認の意味でも奏功したが、授業への関心につなげるためには、常に翌週には目に見える形で返すことが必要であると感じ、地図化に勤しんだ。なんとか毎週、地図化できたことは、前稿最初に示したスクリプトのおかげであった。それでも、次第に毎週、自分たちのことばが可視化されていく快感は、すべてとは言わないまでも一定数の学生には届いたようであった。採りっぱなしのアンケートは、調査者にとって有益であっても答える側には無益である。授業評価も低くはなく教育効果はあったと理解している。

## 6. おわりに

以上見てきたように、方言そのものも、また方言に対する意識も30年間で大きく変わった。岐阜大学に着任してからの21年でも学生の方言に対する知識は激減し、意識も変化してきた。「エライ(しんどい)」や否定の「～ン」などは依然として使われるものの、「ダダクサ(乱雑)」も「ナマカワ(怠惰)」も1割以下の学生にしか通じない。一方で、新しい地域独自のことばの広がりも示せたことで、若者世代のことばが、共通語として流行に敏感であることは、同時に、方言でも変容を生じやすいことでもあると確認できた。

伝統的な方言の衰退を、すべて小中高校の教育の影響とすることはできまい。しかし、岐阜県は一般に「教育熱心な県」と言われている県である。先生たちは学習指導要領を一生懸命遵守し理解をして教育を行なおうとしている。そして、全国や世界で活躍することを是とし、地元に残ることを恥じる風潮も残っている。たしかに全国や世界を知ることは大切である。しかし、多くの人が地元で生活していく以上、教育の軸足は地元置くべきである。そして、地元重視の方向性を、地元の文化とその根源である地元の言語、すなわち方言に据えた教育は、今後益々重要性を増していくものと考えられる。

## 参考文献

沖裕子(1999)「あなたは方言が好きですか」佐藤和之・米田正人編著『どうなる日本のことば——方言と共

通語のゆくえ』大修館書店

加藤和夫(1999)「方言はなくなるならない」佐藤和之・米田正人編著『どうなる日本のことば——方言と共通語のゆくえ』大修館書店

芥子川律治(1971)『名古屋方言の研究』泰文堂

西尾佳称(2022)『愛知県西三河方言における文末表現』岐阜大学教育学部卒業論文

山田敏弘(2008)『ぎふ・ことばの研究ノート第7集 飛騨方言資料に見られる文法項目』私家版

山田敏弘(2015)『ぎふ・ことばの研究ノート第15集 西濃方言資料に見られる文法項目』私家版

山本俊治(1982)「大阪府の方言」『講座方言学 7 近畿地方の方言』国書刊行会

## 謝辞

本考察で使用した地図は、小西いずみ氏が開発した言語地図作成支援スクリプト「txt2txt.jp」を使用して多く描かれている。無償にて当該スクリプトの使用を許可してくださった小西氏に感謝申し上げます。

## 付記

私が専門外ながらも岐阜の方言を研究するようになったのは、大阪大学の博士課程在籍時に、当時、隣の社会言語研究室の助教授であった真田信治先生から尋ねられた問いであった。「岐阜の方言にはどんな特徴があるの?」と問われて、私自身、母方言を十分知らないことを痛感した。以来、その答えを追い求めてきたが、その宿題に十分答えられないまま、真田信治先生が2022年11月13日に逝去された。椋山女学園大学は、真田信治先生が若い頃、短い間ではあったが勤務された大学である。その大学に蒔かれた種に少しでも水と陽光を与えられたのであれば幸いと感じ、拙い考察ではあるが本考察を上梓した。

(令和5年1月6日受理)